

心理的ストレスと問題行動に関する研究（その1）

—ストレス反応についての分析—

矯正協会附属中央研究所 佐藤 和夫
 藤野 京子*
 高桑 益行
 東京矯正管区 玉置 隆久**

1 はじめに

従来に比べて、反社会的行動と非社会的行動の境界線が曖昧になってきており、非行についても、他者に危害を与える粗暴犯などの攻撃的な非行が減少し、一方、薬物非行などに代表されるような非社会的行動が多くなってきたと言われている。こうした非行少年の様相の変化は何によるものなのであろう。現代社会はストレス社会と言われており、サラリーマンの職場ストレスとか、受験戦争による生徒のストレスなど、マスコミを初めとしてストレスという言葉が大流行しているが、非行少年もストレスに打ちのめされて、攻撃のほこ先が他者にはなく自分に向かうようになってきていると解釈することが可能であろうか。

ストレス研究は、医学の分野でセリエによって始められたことは周知の通りであるが、最近では、医学の分野に限らず広範囲でストレス研究がなされており、その一分野として心理学も挙げられる。特に心理学の分野では、ストレスと成り得る刺激（ストレス）を受けた本人が、それをどのように感じたり受けとめるかによって、ストレス反応の程度が変化すると主張する Lazarus & Folkman

（1984）以来、その研究が活発になってきていると言えよう。

非行少年についてのストレス研究は少ないが、その関連分野として、学校ストレスと学校不適応との関係についての研究が挙げられる。図1は岡安ら（1992-1）が紹介している学校ストレスについてのモデルである。

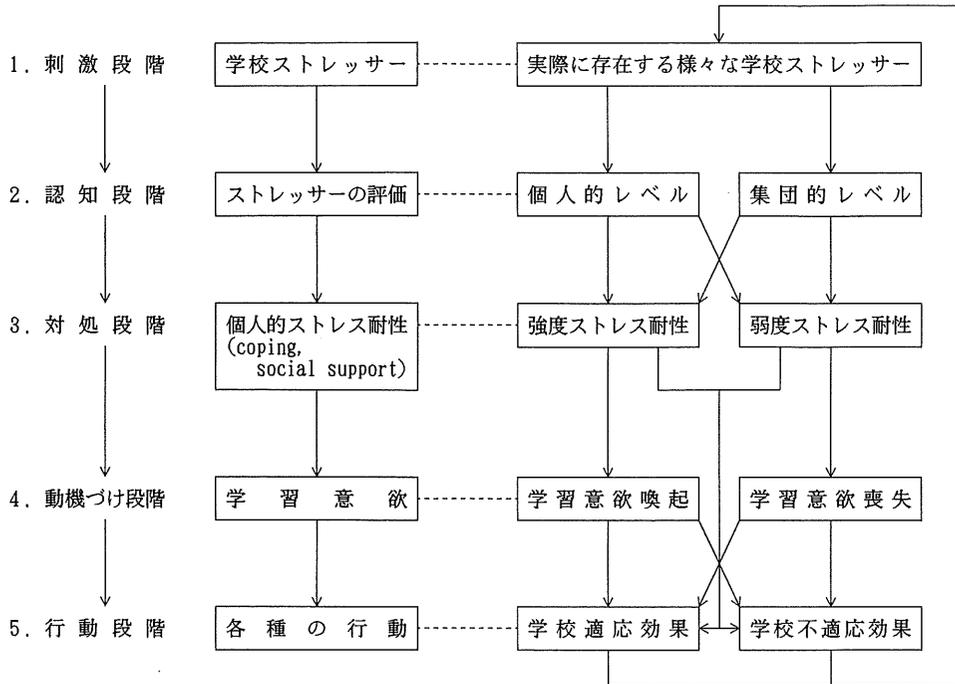
Lazarus & Folkman（1984）を基礎として学校場面に適用したこのモデルでは、学習意欲の低下や喪失をストレス反応とみなしており、こうしたストレス反応が、学校不適応といった不適応行動の出現を導くとしている。そして、この学習意欲の低下や喪失は、単に学校ストレス（刺激段階）が存在するかどうかだけでなく、学校ストレスをどのように感じるか（認知段階）とか、感じたストレスに対してどの程度耐えられるかといった個人の特性（対処段階）などによって、影響されるとしている。なお、この学校に対する適応行動や不適応行動（行動段階）は、学校ストレスの影響を受けるだけにとどまらず、学校ストレスの発生に影響をもたらすともしている。

ところで、このモデルにおける不適応行動を非行に置き換えて解釈することは可能であろう。なぜならば、学校不適応の結果、非行

*法務省矯正局

**川越少年刑務所

図1 学校ストレスのモデル (岡安ら (1992-1) からの引用)



に至ることは十分に考えられるからである。
 非行との関わりでストレス研究をしているものとしては、ストレッサーと非行ないしストレス反応との関連を検討している鈴木 (1988, 1989) をあげることができる。ただし、この研究では、非行を広義のストレス反応とみなしており、ストレス反応と非行との関係については検討していない。しかし、例えば、図1で示したモデルによれば、ストレス反応と学校不適応 (この研究に当てはめれば、非行) の関係は、並列ではなく、ストレス反応の結果もたらされるものなのである。そして、学校不適応といった行動を一旦起こした場合、その行動は新たな学校ストレッサーを招くともしているのである。つまり、鈴木 (1988, 1989) にこれをあてはめて考えると、非行をストレス反応それ自体と位置づけるだけでは不十分であることがわかる。
 また、松本 (1990) は、ストレスから非行をした者と、ストレスと関係なく非行をした

者を比較している。そして、非行を、ストレス状態に陥りながらも、思春期に至って強まってきた自己拡大欲求を充足させたり、劣等感の苦痛を回復させる手段と解釈している。しかし、この研究では、ストレスから非行をしたかどうかの被験者の群分けの方法について、必ずしも厳密な作業手順を経たとは思われない。
 上記のように、非行とストレスとの関係は、これまでの研究で十分明確になったとは言えない。今回の一連の研究の目的は、図1に示したようなストレス過程全般について、非行少年を対象として調査研究することにある。しかし、そのストレス過程の解明については次回の報告に譲ることとして、今回は、ストレス反応について、具体的には以下の3点に焦点を当てて調査研究した結果を報告する。その第一は、ストレス反応の強い者が、実際、非行に陥りやすいと言えるかである。また第二は、非行をする時とは、通常時よりも、一

層強くストレス反応を示している時かどうかである。そして第三は、非行をすることによって、ストレス反応がどのように変化するかである。非行のような行為と言えども、頭がすっきりしたとか、ほっとできたなどの効果を有しているのであろうか。それとも反対に、非行に走ってしまった自分に気づき、また失敗してしまったり自己嫌悪に陥るなど、非行によって、より一層ストレス反応が強まるのであろうか。本調査では、これらの疑問点を解明する中で、現代非行の特徴についての理解を深めたい。

2 目 的

非行少年が、日常生活で感じているストレス反応を調べ、加えて、日常生活におけるストレス反応と本件非行の直前や直後に感じているストレス反応との関係を明らかにすることを目的とした。

3 調査方法

(1) 調査対象者

平成6年4月から6月までの期間、観護措置により全国の少年鑑別所（以下鑑別所とする）に在所していた14歳から19歳までの少年3,283名を対象とした。記入もれや記入ミスが多かったものを除き、有効回答者3194名（有効回答率97.3%、内訳は男子2757名、女子437名）を分析対象とした。

(2) 手続

一般成人のストレス反応を測定する尺度はいくつかあるが、中学生を対象としたものとしては、岡安ら（1992-2）の開発したストレス反応尺度がある。本調査では、調査対象者に中学生を含んでいること、調査対象者の学業成績が概してあまり良くなく、質問内容の理解に多少の困難も予想されたことなどから、この岡安らによる中学生用ストレス反応尺度（1992-2）を使用することにした（注1）。この尺度は、不機嫌・怒り感情尺度

（7項目）、身体的反応尺度（18項目）、抑鬱・不安感情尺度（8項目）、無力的認知・思考尺度（12項目）の合計45項目から成る4つの下位尺度から構成されており、各項目は、中学生にも容易に理解できるような表現に修正してある（項目の具体的内容は表1を参照）。

本調査では、まず、鑑別所に入る前1年間の社会での生活（以下「最近1年」と略す。）について、上記45項目それぞれに対して、「ぜんぜんあてはまらない」「あまりあてはまらない」「すこしあてはまる」「よくあてはまる」の4段階評定をするよう求めた。次に、本件非行直前の状態（以下「非行直前」と略す。）についても、上記45項目それぞれに対して、同じく4段階評定をするよう求めた。さらに、本件非行直後の状態（以下「非行直後」と略す。）については、上記45項目それぞれに対して、非行直前に比べて、「ひどくなった」「かわらなかった」「よくなった」のいずれに該当するかを回答するよう求めた。

逆転項目はなかった。下位尺度の得点化にあたっては、最近1年と非行直前については、「ぜんぜんあてはまらない」を0点、「あまりあてはまらない」を1点、「すこしあてはまる」を2点、「よくあてはまる」を3点とし、それぞれの下位尺度に相当する項目の得点を加算した（注2）。すなわち、得点が高いほど、ストレス反応が強いことを示すこととした。また、非行直後については、「ひどくなった」を-1点、「かわらなかった」を0点、「よくなった」を1点とし、それぞれの下位尺度に相当する項目の得点を加算した。すなわち、「ひどくなった」よりも「よくなった」との回答が多い場合には正の値を、反対に、「よくなった」よりも「ひどくなった」との回答が多い場合には負の値を示すこととした。

さらに、調査対象者の性別、年齢、鑑別所

入所前の就労等の状態，現在の保護者，鑑別所入所前の保護者との居住状況，初発非行年齢，鑑別所や少年院への収容歴，今回鑑別所入所の原因となった罪種（複数ある場合は，最も大きな犯罪について回答するよう求めた。）についての質問も行った。なお，調査は無記名方式で実施した。

4 結 果

(1) 最近1年のストレス反応と非行直前のストレス反応の関係について

表1は，ストレス反応の項目別の結果を示したものである。

最近1年のストレス反応と非行直前のストレス反応の関係について，項目別に検討すると，不機嫌・怒り感情尺度に相当する7項目については，いずれの項目でも，非行直前よりも最近1年のストレス反応出現率（「ぜんぜんあてはまらない」の反応以外の出現率のこと）の方が高かった。また，6項目で，非行直前よりも最近1年の項目得点の方が高かった。項目得点を加算した尺度得点を比較した場合，最近1年では6.82，非行直前では6.23であり，有意差（ $p < .01$ ）があった。

身体的反応尺度に相当する18項目については，17項目で，非行直前よりも最近1年のストレス反応出現率の方が高かった。また，13項目で，非行直前よりも最近1年の項目得点の方が高かった。尺度得点を比較してみると，最近1年では16.54，非行直前では14.92であり，有意差（ $p < .01$ ）があった。

抑鬱・不安感情尺度に相当する8項目については，6項目で，非行直前よりも最近1年のストレス反応出現率の方が高かった。一方，項目得点については，6項目で，最近1年よりも非行直前の方が高かった。尺度得点を比較してみると，最近1年では8.20，非行直前では9.19であり，有意差（ $p < .01$ ）があった。

無力的認知・思考尺度に相当する12項目

については，いずれの項目でも，非行直前よりも最近1年のストレス反応出現率の方が高かった。一方，項目得点については，5項目で，最近1年よりも非行直前の方が高かった。尺度得点を比較してみると，最近1年では11.31，非行直前では11.74であり，有意差（ $p < .01$ ）があった。

以上をまとめてみると，ストレス反応出現率については，概して最近1年の方が非行直前よりも高いことがわかった。調査対象となる期間が長ければ，当然，ストレスを含む様々な体験を有する機会も多くなるわけで，この結果は当然と言えよう。しかし，一方，ストレス反応の強度を示す項目得点や尺度得点を見てみると，必ずしも，最近1年のストレス反応の方が非行直前よりも高いとは限らなかった。不機嫌・怒り感情尺度と身体的反応尺度においては，非行直前よりも最近1年のストレス反応の方が高かったが，反対に，抑鬱・不安感情尺度と無力的認知・思考尺度においては，最近1年よりも非行直前のストレス反応の方が高いことがわかった。

(2) 最近1年のストレス反応について

男女別に各尺度得点をみてみると，不機嫌・怒り感情尺度では，男子6.58，女子8.53，身体的反応尺度では，男子15.94，女子20.85，抑鬱・不安感情尺度では，男子7.83，女子10.69，無力的認知・思考尺度では，男子10.87，女子14.44であり，いずれの尺度においても，男子よりも女子のストレス反応の方が有意（いずれも $p < .01$ ）に高かった。このような性差があったため，以下では，男女別に分析を行っているが，表2に要因ごとの分析結果をまとめてある。

まず，年齢要因については，14歳から19歳まで各歳ごとの群に分けて分散分析を行った。その結果，男子では，不機嫌・怒り感情尺度，抑鬱・不安感情尺度，無力的認知・思考尺度で有意差（いずれも $p < .01$ ）があった。不機嫌・怒り感情尺度では，17～19歳

表1 ストレス反応についての項目ごとの分析

尺度名	項目内容	最近1年の ストレス反応		非行直前の ストレス反応		非行直後の ストレス反応	
		出現率(%)	項目得点	出現率(%)	項目得点	悪化(人)	好転(人)
不 機 嫌 ・ 怒 り 感 情	10) ふきげんで、おこりっぽかった	73.3	1.21	57.0	0.97	151	880
	17) 気持ちがむしゃくしゃしていた	69.4	1.10	60.2	1.06	215	903
	18) だれかにいかりをぶつけたかった	55.9	0.88	47.5	0.78	146	727
	28) いかりを感じた	61.6	0.92	49.5	0.80	175	717
	39) ふゆかいな気分だった	58.8	0.86	53.2	0.87	188	699
	40) 腹だたい気分だった	58.2	0.84	50.0	0.80	151	692
	42) いらいらした	65.4	1.05	55.5	0.98	212	830
	信 頼 性 係 数	.91		.93			
身 体 的 反 応	1) つかれやすかった	85.6	1.50	71.7	1.26	267	737
	3) 胸がむかむかした	54.9	0.77	51.1	0.81	182	675
	6) 頭が重かった	51.5	0.71	46.4	0.69	200	523
	9) 頭痛がした	52.0	0.75	42.2	0.61	146	506
	12) 目がつかれた	68.4	1.14	55.5	0.96	256	509
	15) のどや口がかわいた	72.6	1.25	57.0	1.00	206	584
	16) よく眠れなかった	65.2	1.12	61.2	1.14	440	691
	19) 胸がどきどきした	62.7	0.94	63.0	1.15	341	758
	22) 胸が痛んだ	55.6	0.82	53.5	0.89	385	538
	23) 体が熱っぽかった	45.4	0.59	37.8	0.52	121	444
	24) はきけがした	39.5	0.54	34.8	0.50	136	468
	25) 腰が痛かった	68.4	1.29	55.2	1.02	243	521
	27) 体がだるかった	72.0	1.21	59.8	1.06	260	773
	32) 手足がしびれるような感じがした	34.9	0.46	32.7	0.44	125	392
33) 肩がこった	71.4	1.37	56.3	1.03	245	550	
36) お腹が痛かった	54.7	0.79	40.1	0.59	136	451	
38) 頭がくらくらした	51.2	0.72	41.3	0.62	149	486	
41) 食欲がなかった	49.5	0.75	48.0	0.81	285	664	
	信 頼 性 係 数	.89		.91			
抑 鬱 ・ 不 安 感 情	7) なんだかこわい感じがした	49.0	0.75	58.4	1.08	432	697
	13) みじめな気持ちだった	62.2	1.01	61.8	1.17	497	648
	20) 不安を感じた	74.6	1.33	73.9	1.50	631	789
	30) さみしい気持ちだった	68.5	1.25	63.5	1.22	466	591
	31) 気持ちが緊張していた	62.0	0.89	60.0	1.07	325	675
	34) 泣きたい気分だった	62.8	1.09	55.6	1.04	453	547
	44) 悲しかった	62.8	1.06	61.4	1.17	493	575
45) 心が暗かった	55.0	0.87	55.4	0.99	372	606	
	信 頼 性 係 数	.90		.91			
無 力 的 認 知 ・ 思 考	2) なにもやる気がしなかった	65.1	0.93	63.0	1.03	211	879
	4) 頭の回転がにぶく、考えがまとまらなかった	71.2	1.08	62.3	1.04	187	771
	5) 未来に希望がもてなかった	56.2	0.89	55.0	0.93	263	869
	8) 体から力がわいてこなかった	59.7	0.85	56.2	0.91	214	728
	11) 何事にも自信がなかった	73.0	1.08	60.9	1.02	194	739
	14) ひとつのことに集中することができなかった	74.2	1.24	64.0	1.13	193	889
	21) 学校や職場に行く気がしなかった	62.5	1.04	56.5	1.01	195	916
	26) なにもかもいやだった	56.3	0.85	54.1	0.92	241	734
	29) ひとりでじっとしていたかった	52.5	0.79	46.8	0.76	155	575
	35) むずかしいことを考えることができなかった	69.9	1.13	58.9	1.01	169	704
	37) 根気がなかった	72.9	1.20	59.7	0.99	125	811
43) 勉強や仕事に手につかなかった	63.5	1.06	60.5	1.10	206	864	
	信 頼 性 係 数	.88		.91			

表2 最近1年のストレス反応について(要因ごとの尺度得点及び分散分析の結果)

要因	尺度名	男 子					女 子				
		N	不機嫌・ 怒り感情	身体的 反応	抑鬱・ 不安感情	無力的認 知・思考	N	不機嫌・ 怒り感情	身体的 反応	抑鬱・ 不安感情	無力的認 知・思考
年齢	14歳	83	8.29	17.88	10.27	13.09	49	10.02	22.52	11.33	17.43
要因	15歳	185	6.78	16.01	8.16	11.38	49	8.12	21.23	9.62	16.08
	16歳	438	6.93	16.16	7.46	11.53	81	9.81	22.07	10.93	15.51
	17歳	643	6.40	15.71	7.63	10.91	104	8.39	20.82	11.76	14.19
	18歳	707	6.30	15.61	7.74	10.48	80	7.30	18.98	9.38	12.66
	19歳	701	6.56	16.12	7.98	10.41	74	7.89	20.26	10.60	12.47
	p=		**	0.39	**	**	**	**	0.34	0.89	**
就労等の 状態要因	在学	306	6.54	15.77	7.94	11.24	57	8.32	20.11	10.63	13.65
	就労	1476	6.06	15.39	7.17	9.45	132	7.90	20.07	10.62	11.33
	在学就労	148	7.13	17.77	8.60	11.04	16	10.75	24.69	11.94	15.20
	無所属	782	7.42	16.63	8.74	13.30	219	8.88	21.40	10.67	16.47
p=		**	**	**	**		0.12	0.25	0.86	**	
保護者 要因	実親なし	135	7.12	17.17	9.53	12.19	15	9.33	18.14	12.29	12.85
	片親	1377	6.67	16.10	7.97	10.91	231	8.51	20.80	10.47	14.35
	実父母	1229	6.40	15.65	7.51	10.70	187	8.46	20.90	10.74	14.63
p=			0.17	0.14	**	0.06		0.83	0.60	0.51	0.66
居住 要因	同居	2180	6.52	15.88	7.73	10.82	295	8.44	20.83	10.48	14.29
	別居	565	6.76	16.16	8.23	11.01	137	8.64	20.65	11.00	14.60
p=			0.32	0.53	0.07	0.57		0.73	0.86	0.40	0.67
初発非行 年齢要因	小卒以前	314	7.05	16.53	8.73	11.14	27	10.80	24.38	13.26	18.71
	中学以降	2414	6.53	15.92	7.73	10.86	402	8.39	20.72	10.52	14.21
	p=			0.09	0.27	**	0.50		*	0.07	*
収容歴 要因	鑑別所入所	2415	6.49	15.73	7.57	10.84	399	8.51	20.81	10.52	14.48
	少年院入院	272	7.36	17.75	9.81	11.11	23	10.09	23.52	13.39	13.45
	p=		**	**	**	0.53		0.17	0.21	*	0.50
罪種 要因	財産犯	1112	6.49	16.39	8.06	11.19	74	7.58	17.89	9.70	13.32
	粗暴犯	643	7.10	15.76	7.59	10.53	58	8.82	21.05	10.41	13.91
	凶悪犯	101	7.02	14.82	7.92	12.34	7	11.00	31.14	19.00	22.29
	性犯	79	6.67	16.10	7.89	10.27					
	交通犯	351	5.47	14.68	6.90	9.50	7	6.00	22.86	8.43	8.43
	薬物犯	75	7.64	18.12	8.84	11.71	91	7.93	21.51	11.15	13.27
p=		**	**	*	**		0.28	**	**	**	

注) p=の行は分散分析を行った際の危険率を示している。なお, **は $p < .01$, *は $p < .05$ を示している。

N欄は、各群の該当者数を示している。なお、年齢要因以外においては、どの群に相当するか不明の者がいたため、要因内のすべての群の人数を合計しても、調査対象者総数にはならない。

に比べて14～16歳の方が、抑鬱・不安感情尺度では、16～19歳に比べて14～15歳の方が、無力的認知・思考尺度では、17～19歳に比べて14～16歳の方が、高いストレス反応を示した。一方、女子では、不機嫌・怒り感情尺度と無力的認知・思考尺度で有意差（いずれも $p < .01$ ）があった。2尺度とも、他の年齢に比べて18～19歳のストレス反応の方が低かった。つまり、男女とも、低年齢層ほど、高いストレス反応を示すとの結果が得られた。

鑑別所入所前の就労等の状態要因については、在学群、就労群、在学中かつ就労中の群（以下「在学就労群」と略す。）、在学しておらず就労もしていない群（以下「無所属群」と略す。）の4群で分散分析を行った（在学とか就労とは、学校や仕事に行くべき日のおよそ半分以上行っていることを指すことにした。）。その結果、男子では、いずれの尺度でも有意差（いずれも $p < .01$ ）があった。不機嫌・怒り感情尺度、抑鬱・不安感情尺度、無力的認知・思考尺度では、無所属群のストレス反応が最も高く、就労群のストレス反応が最も低かった。一方、身体的反応尺度では、在学就労群のストレス反応が最も高く、就労群のストレス反応が最も低かった。また、女子では、在学就労群の該当者数が少なくははっきりとした結果は得られなかったが、無力的認知・思考尺度で有意差（ $p < .01$ ）があった。無所属群のストレス反応が最も高く、就労群のストレス反応が最も低かった。

現在の保護者要因については、実父母がそろっている群（以下「実父母群」と略す。）、実父または実母のいずれか片方が欠けている群（以下「片親群」と略す。）、実父母いずれも欠けている群（以下「実親なし群」と略す。）の3群で分散分析を行った。その結果、男子では、抑鬱・不安感情尺度で有意差（ $p < .01$ ）があり、実親なし群のストレス反応が最も高く、実父母群のストレス反応が最も

低かった。また、有意差はなかったものの、他の尺度でも同様の傾向がみられた。一方、女子では、実父母なし群の該当者数が少なくはっきりとした結果を得ることはできず、いずれの尺度でも有意差がなかった。

鑑別所入所前の保護者との居住要因については、同居群と別居群の2群で分散分析を行った。男女とも、有意差はなかったが、女子の身体的反応尺度を除き、同居群に比べて別居群のストレス反応の方が高い傾向にあった。

初発非行年齢要因については、初発非行年齢が、小学卒業以前の群（以下「小卒以前群」と略す。）、中学入学以降の群（以下「中学以降群」と略す。）の2群で分散分析を行った。その結果、男子では、抑鬱・不安感情尺度で有意差（ $p < .01$ ）があった。中学以降群より小卒以前群のストレス反応の方が高かった。一方、女子では、不機嫌・怒り感情尺度、抑鬱・不安感情尺度、無力的認知・思考尺度で有意差（無力的認知・思考尺度は $p < .01$ 、その他は $p < .05$ ）があった。いずれも中学以降群より小卒以前群のストレス反応の方が高かった。

収容歴要因については、少年院入院歴のない群（以下「鑑別所入所群」と略す。）と少年院入院歴がある群（以下「少年院入院群」と略す。）の2群で分散分析を行った。その結果、男子では、不機嫌・怒り感情尺度、身体的反応尺度、抑鬱・不安感情尺度で有意差（いずれも $p < .01$ ）があった。いずれの尺度でも、鑑別所入所群より少年院入院群のストレス反応が高かった。一方、女子では、抑鬱・不安感情尺度で有意差（ $p < .05$ ）があった。鑑別所入所群より少年院入院群のストレス反応の方が高かった。

罪種要因については、財産犯（窃盗、詐欺、横領）、粗暴犯（傷害、暴行、恐喝、凶器準備集合）、凶悪犯（殺人、強盗）、性犯（強姦、強制猥褻）、交通犯（道路交通法違反、業務上過失傷害・致死）、薬物犯（毒物劇物

取締法違反, 覚醒剤取締法違反)の6群(女子については, 性犯を除く5群)で分散分析を行った(ぐ犯など, いずれの群にも分類されないものは除外した。)。その結果, 男子では, いずれの尺度においても, 有意差(抑鬱・不安感情尺度は $p < .05$, その他は $p < .01$)があった。4尺度ともに, 交通犯のストレス反応が最も低かった。また, 不機嫌・怒り感情尺度, 身体的反応尺度, 抑鬱・不安感情尺度では, 薬物犯のストレス反応が最も高く, 無力的認知・思考尺度では, 凶悪犯のストレス反応が最も高く, 薬物犯がそれに続いた。一方, 女子では, 身体的反応尺度, 抑鬱・不安感情尺度, 無力的認知・思考尺度で有意差(いずれも $p < .01$)があった。凶悪犯及び交通犯の該当者数が少なかったため信頼性に疑問は残るものの, 上記3尺度では, 凶悪犯のストレス反応が最も高かった。また, 抑鬱・不安感情尺度及び無力的認知・思考尺度では, 交通犯のストレス反応が最も低かった。比較的該当者数の多い財産犯, 粗暴犯, 薬

物犯の3群を比較してみると, 薬物犯は他の2群に比べて, 身体的反応尺度及び抑鬱・不安感情尺度においてストレス反応が高かった。

(3) 非行直前のストレス反応について

男女別に各尺度得点をみてもみると, 不機嫌・怒り感情尺度では, 男子5.96, 女子8.00, 身体的反応尺度では, 男子14.24, 女子19.62, 抑鬱・不安感情尺度では, 男子8.92, 女子10.99, 無力的認知・思考尺度では, 男子11.28, 女子14.81であり, いずれの尺度においても, 最近1年のストレス反応同様, 男女差が有意(いずれも $p < .01$)であった。

ところで, 非行直前のストレス反応を検討するにあたっては, 非行に関わる要因との関係について調べる必要がある。したがって, 初発非行年齢, 収容歴, 罪種との関連で分析を行ったが, その結果は, 表3にまとめてある。なお, 非行直前のストレス反応については, 当然, 最近1年のストレス反応の影響を受ける(注3)ため, 分析に際しては, 従属変数となる非行直前のストレス反応と同一の

表3 非行直前のストレス反応について(要因ごとの尺度得点及び共分散分析の結果)

要因	尺度名	男子				女子			
		不機嫌・ 怒り感情	身体的 反応	抑鬱・ 不安感情	無力的認 知・思考	不機嫌・ 怒り感情	身体的 反応	抑鬱・ 不安感情	無力的認 知・思考
初発非行 年齢要因	小卒以前	6.43	15.00	9.61	11.64	10.48	23.30	11.88	18.88
	中学以降	5.90	14.18	8.84	11.25	7.85	19.45	10.93	14.58
	p=	0.48	0.54	0.72	0.92	0.13	0.88	0.22	0.62
収容歴 要因	鑑別所入所	5.81	13.92	8.61	11.13	8.05	19.73	10.93	14.90
	少年院入院	7.10	16.90	11.07	12.49	8.96	21.33	13.09	15.21
	p=	**	**	*	**	0.70	0.59	0.56	0.69
罪種 要因	財産犯	5.64	14.81	9.46	11.82	7.29	16.46	11.01	13.01
	粗暴犯	6.94	14.00	8.31	10.95	10.84	22.40	11.79	16.86
	凶悪犯	7.35	13.82	9.62	12.63	10.14	29.57	16.00	23.83
	性犯	6.67	14.36	10.38	11.30	—	—	—	—
	交通犯	4.50	12.54	7.56	9.71	4.43	18.14	9.00	8.86
	薬物犯	7.15	18.65	10.16	13.03	7.12	20.13	10.76	13.73
	p=	**	*	**	0.43	**	0.11	0.24	*

注) p=の行は共分散分析を行った際の危険率を示している。なお, **は $p < .01$, *は $p < .05$ を示している。

最近1年のストレス反応を共変量として、共分散分析を行った。

初発非行年齢要因については、男女とも、有意差がなかった。すなわち、初発非行年齢要因の非行直前のストレス反応に対する影響力は、最近1年のストレス反応以上のものではないことがわかる。

つぎに収容歴要因については、男子では、いずれの尺度でも有意差（抑鬱・不安感情尺度は $p < .05$ 、その他は $p < .01$ ）があった。この結果は、鑑別所入所群に比べて少年院入院群のストレス反応の方が高いという傾向が、最近1年よりも非行直前のストレス反応で一層顕著になるという結果を示唆している。一方、女子では、有意差がなかった。

罪種要因については、男子では、不機嫌・怒り感情尺度、身体的反応尺度、抑鬱・不安感情尺度で有意差（身体的反応尺度は $p < .05$ 、その他は $p < .01$ ）があった。不機嫌・怒り感情尺度については、概して最近1年よりも非行直前のストレス反応の方が低い傾向にあったが、凶悪犯では、非行直前の反応の方が高く、また、性犯では、非行直前と最近1年のストレス反応が同程度であった。身体

的反応尺度についても、概して最近1年よりも非行直前のストレス反応の方が低い傾向にあったが、薬物犯では、非行直前の反応の方が高かった。抑鬱・不安感情尺度については、いずれの罪種でも最近1年よりも非行直前のストレス反応の方が高かったが、性犯の非行直前のストレス反応は特に高まっており、反対に最近1年と非行直前の差が小さかったのは、交通犯や粗暴犯であった。一方、女子では、不機嫌・怒り感情尺度と無力的認知・思考尺度で有意差（不機嫌・怒り感情尺度は $p < .01$ 、無力的認知・思考尺度は $p < .05$ ）があった。不機嫌・怒り感情尺度については、概して非行直前よりも最近1年のストレス反応の方が高かったが、粗暴犯では、非行直前の反応の方が高かった。また、無力的認知・思考については、概して最近1年よりも非行直前のストレス反応の方が高い傾向にあったが、財産犯では、非行直前の反応の方が低い傾向にあった。

(4) 非行直後のストレス反応について

表1に、非行直前に比べて非行直後のストレス反応がどのように変化したかの人数が示されている。いずれのストレス反応尺度に相

表4-1 最近1年、非行直前、非行直後の不機嫌・怒り感情尺度の関係

		非行直後のストレス反応			
		悪化	無変化	好転	合計
非行直前と最近1年の関係	非行直前>最近1年	112	192	529	833
		13.4	23.0	63.5	
	非行直前=最近1年	67	314	179	560
		12.0	56.1	32.0	
	非行直前<最近1年	145	657	460	1,262
		11.5	52.1	36.5	
合計		324	1,163	1,168	2,655

注) 上段は該当者数, 下段はその比率(%)を示している。なお, どの群に相当するか不明の者がいたため, 該当者数の合計は, 調査対象者総数にはならない。

表4-2 最近1年, 非行直前, 非行直後の身体的反応尺度の関係

		非行直後のストレス反応			
		悪化	無変化	好転	合計
非行直前と最近1年の ストレス反応の 関係	非行直前>最近1年	239	124	493	856
		27.9	14.5	57.6	
	非行直前=最近1年	49	62	104	215
		22.8	28.8	48.4	
	非行直前<最近1年	323	397	672	1,392
		23.2	28.5	48.3	
	合計	611	583	1,269	2,463

注) 表4-1の注を参照。

表4-3 最近1年, 非行直前, 非行直後の抑鬱・不安感情尺度の関係

		非行直後のストレス反応			
		悪化	無変化	好転	合計
非行直前と最近1年の ストレス反応の 関係	非行直前>最近1年	428	248	604	1,280
		33.4	19.4	47.2	
	非行直前=最近1年	97	180	115	392
		24.7	45.9	29.3	
	非行直前<最近1年	265	378	331	974
		27.2	38.8	34.0	
	合計	790	806	1,050	2,646

注) 表4-1の注を参照。

表4-4 最近1年, 非行直前, 非行直後の無力的認知・思考尺度の関係

		非行直後のストレス反応			
		悪化	無変化	好転	合計
非行直前と最近1年の ストレス反応の 関係	非行直前>最近1年	220	225	785	1,230
		17.9	18.3	63.8	
	非行直前=最近1年	33	113	124	270
		12.2	41.9	45.9	
	非行直前<最近1年	167	390	486	1,043
		16.0	37.4	46.6	
	合計	420	728	1395	2,543

注) 表4-1の注を参照。

当する項目についても、非行直後、ストレス反応が非行直前に比べて悪化したと回答する人数よりも、好転したと回答する人数の方が多かったことがわかる。

男女別に各尺度得点をみても、不機嫌・怒り感情尺度では、男子 1.39、女子 1.55、身体的反応尺度では、男子 2.02、女子 2.02、抑鬱・不安感情尺度では、男子 .42、女子 .56、無力的認知・思考尺度では、男子 2.36、女子 2.57 であり、男女差はいずれも有意でなかった。前述のように、最近1年のストレス反応や非行直前のストレス反応については、男女差があったものの、非行直後のストレス反応の変化については、男女差があるとは言えないことがわかる。

次に、非行直後のストレス反応が、最近1年のストレス反応と非行直前のストレス反応との関係において、どのようなものであるかを検討する。表4-1～表4-4は、最近1年に比べて非行直前のストレス反応が高い群、同じ群、低い群3群のそれぞれについて、非行直

後のストレス反応が非行直前に比べて悪化した群、変化しなかった群、好転した群のいずれに該当するかの人数及びその比率をストレス反応尺度ごとに示したものである。

非行直後のストレス反応が非行直前と比べて変化しなかったとの回答率については、いずれのストレス反応尺度においても、最近1年よりも非行直前のストレス反応の高い群で最も低く、反対に、最近1年と非行直前のストレス反応が同程度の群で最も高かったことがわかる。また、身体的反応尺度においては、非行直後好転したとの回答率と悪化したとの回答率が、最近1年に比べて非行直前のストレス反応が高い群、同じ群、低い群の3群間で差がなかったが、不機嫌・怒り感情尺度、抑鬱・不安感情尺度、無力的認知・思考尺度では、最近1年に比べて非行直前のストレス反応の高い群の方が低い群に比べて、非行直後好転したとの回答率が高かったこともわかる。

ところで、非行直後のストレス反応がどの

表5 非行直後のストレス反応について（要因ごとの尺度得点及び分散分析の結果）

要因	尺度名	男子				女子			
		不機嫌・怒り感情	身体的反応	抑鬱・不安感情	無力的認知・思考	不機嫌・怒り感情	身体的反応	抑鬱・不安感情	無力的認知・思考
初発非行 年齢要因	小卒以前	1.43	2.22	0.39	2.37	2.23	4.79	1.81	3.84
	中学以降	1.38	1.99	0.42	2.35	1.53	1.89	0.52	2.49
	p=	0.80	0.56	0.89	0.93	0.33	*	0.12	0.30
収容歴 要因	鑑別所入所	1.42	2.04	0.45	2.38	1.59	2.08	0.62	2.70
	少年院入院	1.07	1.29	-0.14	1.93	1.50	-0.12	-0.22	1.19
	p=	0.08	0.08	*	0.17	0.90	0.16	0.35	0.21
罪種 要因	財産犯	1.20	2.03	0.55	2.32	1.49	2.04	0.55	2.15
	粗暴犯	1.83	2.02	0.39	2.48	1.71	1.61	0.16	2.43
	凶悪犯	1.24	0.64	-0.01	1.67	2.33	4.75	1.00	2.40
	性犯	1.37	2.21	-0.16	2.30	-	-	-	-
	交通犯	1.06	1.70	-0.07	1.92	2.00	4.00	1.00	3.67
	薬物犯	1.51	2.48	0.57	2.50	1.09	0.97	0.03	1.76
	p=	**	0.38	0.10	0.49	0.74	0.59	0.86	0.86

注) p=の行は分散分析を行った際の危険率を示している。なお、**は p<.01、*は p<.05を示している。

ように変化するかを検討するにあたっては、非行直前の分析同様、非行に関わる要因との関係について調べる必要がある。初発非行年齢、収容歴、罪種との関連で分析を行った結果が表5に示されている。

初発非行年齢要因についての分散分析の結果、男子では、有意差がなかった。一方、女子では、身体的反応尺度についてのみ有意差 ($p < .05$) があった。中学以降群よりも小卒以前群の方が、好転したと回答する傾向にあった。

収容歴要因についての分散分析の結果、男子では、抑鬱・不安感情尺度において有意差 ($p < .05$) があった。鑑別所入所群は、非行直後好転したと回答する傾向があり、反対に少年院入院群については、非行直後悪化したと回答する傾向にあった。一方、女子では、

身体的反応尺度及び抑鬱・不安感情尺度における少年院入院群で、非行直後悪化したと回答する傾向があったが、いずれの尺度でも有意差はなかった。

罪種要因の分散分析の結果、男子では、不機嫌・怒り感情尺度において有意差 ($p < .01$) があった。交通犯に比べて粗暴犯や薬物犯は、非行直後好転したと回答する程度が強かった。また、男子の抑鬱・不安感情尺度については、有意差はなかったものの、性犯、交通犯、凶悪犯において、非行直後悪化したと回答する傾向にあった。一方、女子では、いずれの尺度においても有意差がなかったが、薬物犯については、いずれの尺度においても、非行直後好転したと回答する程度が弱い傾向にあった。

表6 中学生のストレス反応について

尺度名	学年		1年生		2年生		3年生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
不機嫌・怒り感情	6.9	7.7	7.5	7.1	7.7	8.6		
身体的反応	10.1	12.8	10.7	11.9	11.9	14.2		
抑鬱・不安感情	3.3	4.3	3.3	4.7	4.4	5.3		
無力的認知・思考	6.7	9.7	8.6	11.6	9.8	11.6		

注) 岡安ら (1992-2) からの引用

5 考 察

今回の調査におけるまず初めの疑問は、ストレス反応の強い者が、実際、非行に陥りやすいかということであった。今回の調査は、鑑別所に収容中の14歳から19歳までの少年を対象として行われたが、岡安ら (1992-2) では、中学1年生から3年生までを対象に、同じ項目を用いてストレス反応を測定している。

そこで、本調査における最近1年のストレス反応のうち、中学生の年齢に相当する14歳から15歳のストレス反応尺度得点と、表6に示した岡安ら (1992-2) の中学生の

ストレス反応尺度得点を比較してみると、非行少年、一般少年を問わず、男子よりも女子の方が、ストレス反応尺度得点が高く、男女別に両者を比較してみると、不機嫌・怒り感情尺度を除き、一般少年に比べて非行少年のストレス反応尺度得点の方が、明らかに高いとの結果が得られた。すなわち、非行少年は、一般少年に比べて、日ごろからストレス反応を強く感じていると言えるのではなからうか。

さらに、上記問題点について、本調査の調査対象者の非行歴等の兼ね合いから検討してみる。最近1年のストレス反応について、初発非行年齢別に見てみると、いずれの尺度においても、男女ともに、中学以降群よりも小

卒以前群のストレス反応の方が高く、男子では1尺度で、女子では3尺度で、その傾向が有意であった。一般に初発非行の早さは非行性が進み予後も悪いとするメルクマルの一つとされているが、その初発非行が早い群のストレス反応の方が高いということである。また、収容歴別にみても、女子の無力的認知・思考尺度を除き、男女いずれの尺度においても、鑑別所入所群よりも少年院入院群のストレス反応の方が高く、男子では3尺度、女子では1尺度で、その傾向が有意であった。少年院入院歴を持つこととは、すでに過去において、非行性の程度が進んでいたということであり、こうした群のストレス反応の方が高いということである。したがって、これらの結果からは、非行が過去からかなり問題になっている者の方が、日常生活において、ストレス反応をより強く感じていると言えそうである。

なお、罪種別にみても、男子では、他の罪種に比べて交通犯のストレス反応が低かった。業務上過失致死傷に代表されるような交通犯は、他の罪種に比べ、いわゆる非行文化に染まっていない一般少年に近い者でも犯してしまう危険性が高い罪種であることを、臨床場面において経験しているが、本調査の結果、この交通犯の最近1年のストレス反応が低かったことから、一般少年に近い者のストレス反応はあまり高くないことが示唆されるのではなかろうか。

この他、最近1年のストレス反応について、鑑別所入所以前の生活状況と照らし合わせると、以下のことが明らかになった。まず、鑑別所入所前の就労等の状態別にみても、無所属群のストレス反応が全般に高いことが明らかになった。何かしなければならぬといったあせりや、したいのに適当なものが見つからないといった苛立ちが、ストレス反応を起こさせるのであろうか。それとも、ストレス反応の強さゆえ、結果として、学校にも

職場にも行けず、何もできない状態となるのであろうか。また、二番目に高いストレス反応は、在学就労群であった。これは、多忙ゆえのストレス反応と解釈することも可能であり、上記の無所属群のものとは意味合いが異なると推察される。なお、在学群に比べて、就労群のストレス反応の方が低いとの結果が得られた。非行少年の多くは、学校社会の落ちこぼれとみられており、学校社会での適応状態が必ずしも良くないことは周知の事実である。不適応感を持ちながらも学校に行かなければならないと思って出席していること自体、かなりの苦痛なのであろう。しかし一方、こうした少年達の受け皿となっている職場の就労条件が必ずしも良くないことは容易に想像されよう。にもかかわらず、就労群のストレス反応が在学群のストレス反応に比べて低いのは、少なくともどんな職場でも学校へ行くよりはましであることを示唆していると解釈してよいということであろうか。

保護環境別にみても、まず、鑑別所入所前の保護者との居住状態については、有意差はなかったものの、女子の身体的反応尺度を除き、別居群よりも同居群のストレス反応の方が低い傾向にあった。また、現在の保護者についても、有意差がみられたのは、男子の抑鬱・不安反応尺度に限定されたが、女子の身体的反応尺度、無力的認知・思考尺度を除き、実親なし群は、他の群に比べてストレス反応が高い傾向にあった。親と同居しないこととか、実父母が存在しないこと自体のストレス反応と言えるのであろうか。それとも、困難等に会った際、親に慰められたり励まされるなど、親が癒しの作用を施す結果なのであろうか。この点については、今後の課題であろう。

次に、今回の調査における第二の疑問は、非行直前のストレス反応と通常時のストレス反応の関係であった。近年のストレス反応の測定動向として、一次元的尺度が少なくなり

総合的尺度が多くなる傾向がみられ(岡安ら, 1993), 今回使用したストレス反応尺度も多次元尺度であったが, 実際, 本調査では, 非行直前のストレス反応の強さと最近1年のストレス反応の強さが, ストレス反応尺度の種類によって異なるとの結果を得た。このことは, 一言でストレス反応といっても, 多様な様相があることを示している。

まず, 身体的反応尺度については, 非行直前に比べて最近1年のストレス反応の方が高かった。頭痛に代表されるような身体反応を起している状態では, 非行に走るだけのエネルギーも乏しくなっていると考えられ, この結果は理解できる。また, 不機嫌・怒り感情尺度についても, 身体的反応尺度同様, 非行直前に比べて最近1年のストレス反応の方が高かった。一般的に非行とは, 他者に対する攻撃的行動を思い浮かべやすいが, そうしたストレス即非行といった短絡性のものよりも, 長期間にわたる日常的なストレスの蓄積による非行と考えられるのである。最近の非行は覇気がないとか動機が分かりにくいなどと言われるようになってきていることも, こうした臨床像を反映させていると解釈できる。一方, 抑鬱・不安感情尺度及び無力的認知・思考尺度においては, 上記傾向とは逆に, 最近1年の反応に比べて非行直前の反応の方が高いとの結果が得られた。このことは, 通常時にも増して, 抑鬱・不安におののき, 無力感に打ちのめされた状態で非行に至っているということである。このような状況下であるため, 非行も自滅的, 内向的な様相を呈するのではなからうか。最近の非行には, 周囲の状況が非行直前に変化することもなく, 本人自身もなぜその時非行に走ってしまったかを説明するのに困ってしまうようなものがみられるが, これは, 日ごろから少しずつ蓄積されていたストレス反応が限界を越えた結果なのかもしれない。

ところで, 非行直前のストレス反応は, 初

発非行が早いほど, また, 収容歴が多いほど, 高くはないことが予想された。初発非行が早かったり, 収容歴が多いほど, 非行も習慣化されて, ストレス反応の高低とは関係なく非行に至ることが予想されたからである。しかし, 今回の調査結果では, いずれの尺度においても, 小卒以前群よりも中学以降群の非行直前のストレス反応が高いとは言えないこと, また, 少年院入院群よりも鑑別所入所群の非行直前のストレス反応が高いとは言えないことが, 明らかになった。それどころか, 男子については, いずれの尺度においても, 最近1年のストレス反応よりも非行直前のストレス反応の方で, 鑑別所入所群に比べ少年院入院群のストレス反応が高くなる傾向がより強まるとの結果を得たのである。

罪種別にしてみると, まず, 粗暴犯や凶悪犯では, 他の罪種に比べて, 腹が立ったから, ムシャクシャしたからなどといった理由に代表されるように, 非行直前の不機嫌・怒り感情尺度におけるストレス反応が高いことが予想され, 予想どおりの結果が得られた。特に, 男子の凶悪犯や女子の粗暴犯では, 最近1年に比べても非行直前のストレス反応が高まる傾向にあった。また, 男子の性犯については, 他の罪種に比べて, 最近1年よりも非行直前の抑鬱・不安感情が高まる傾向にあった。また, 男子の最近1年のストレス反応については, 他の罪種に比べて薬物犯のストレス反応が, どの尺度についても高く(無力的認知・思考尺度以外は罪種群の中で最も高く), 常態的にストレス反応を有しており, その状態が非行直前にまで持ち越されていることが明らかになった。ストレス反応に持続的に悩まされ, それに対する現実逃避の意味あいから, 薬物非行に至るといった一般的な解釈を裏づける結果と言えよう。ただし, 女子の最近1年及び非行直前のストレス反応においては, 該当者数が比較的多い財産犯, 粗暴犯, 薬物犯の3群で比較しても, 薬物犯のストレス反

応が必ずしも高いとは言えなかった。女子の場合、薬物そのものを暴力団等から提供されたり、風俗産業と結びついていることがあるなど、かなり刹那的で快楽的なニュアンスがあり、その点で男子に比べて現実逃避的な意味合いが薄いのかもしれない。このように、ストレス反応と非行の関係については、罪種により、また、性別によって異なるようであるが、この点の詳細については、今後の研究課題と言えよう。

なお、最近1年と非行直前のストレス反応の差について男女を比較してみると、女子よりも男子の差の方が大きかった。つまり、女子に比べて男子の方が、ストレス反応の強度が一時的に変化した時に、非行が生じる傾向にあると言える。女子の場合、特定の犯罪で鑑別所入所に至るよりも、ぐ犯（注4）に代表されるような生活全般の崩れが原因で鑑別所入所に至ることが多いため、非行時とそうでない時の差が小さくなると解釈できるのではなかろうか。

第三の疑問は、非行をすることで、ストレス反応がどのように変化するかということであった。男女とも、非行直前と非行直後のストレス反応が変わっていないとの反応が多かったが、非行直前に比べて非行直後のストレス反応が悪化したと感じるよりは、好転したと感じる傾向にあった。特に、最近1年に比べて非行直前にストレス反応が高まった群においては、非行直前と非行直後のストレス反応が同じであるとの回答が少なく、非行直前に比べて非行直後のストレス反応が好転したと回答する傾向にあった。ストレス反応が軽減するからといって、非行を肯定的に受けとめることはできないが、非行行為にストレス反応を低下させる一種の効果があることは事実のようであり、この結果は興味深い。松本（1990）も、非行が劣等感の苦痛を回復させる手段になると言及しているが、本調査の結果も、これを支持するものであると言えよう。

なお、非行歴別に非行の効果を見てみると、非行を繰り返す群の方が、非行によってすっきりできたなどのストレス反応軽減の程度が大きいと予想された。非行によるストレス反応軽減の体験が強化の因子となり、その体験がフィードバックされ、非行が繰り返されると予想されたからである。しかし、今回の調査では、こうした予想は支持されず、むしろ反対に、男子の鑑別所入所群に比べ少年院入院群では、抑鬱・不安感情尺度において、非行直前に比べて非行直後のストレス反応の方がより悪化すると結果が得られたのである。また、有意ではなかったものの、女子についても、鑑別所入所群に比べ少年院入院群では、身体的反応尺度や抑鬱・不安感情尺度において、非行直前に比べて非行直後のストレス反応の方がより悪化すると結果が得られたのである。少年院入院という非行行為への制裁を過去に体験していることで、再収容への危惧と後悔が入り混じり、ストレス反応が高まるのかもしれない。ただし、この少年院入院群についても、残りのストレス反応尺度においては、非行直前に比べて悪化するよりは好転する傾向にあった。つまり、非行の進んだ群の方が必ずしも非行によるメリットを強く体験しているわけではないが、反対に、非行の進んだ群においても、非行という行為をすることがデメリットばかりを招くものではないということである。

最後に、非行の効果について、罪種別に検討したい。有意差があったのは、男子の不機嫌・怒り感情尺度のみであった。交通犯よりも粗暴犯は、非行直前に比べて非行直後にストレス反応が好転したと感じている程度が強いとの結果が得られたのだが、粗暴犯は交通犯に比べ、怒り・不機嫌の表出反応であるため、それを終えた後にストレス反応が軽減されるということは容易に理解される。しかし、このような傾向は凶悪犯についても予想されたが、予想どおりの結果は得られなかった。

また、常態的にストレス反応を有している男子の薬物犯については、他の罪種に比べ、いずれの尺度においても、ストレス反応が好転する程度が強い傾向にあることが明らかになったが、女子の薬物犯については、男子と異なり、他の罪種に比べて、非行直後ストレス反応が好転する程度が必ずしも強いという結果を得られなかった。また、男子の性犯では、他の罪種に比べて、非行直前に抑鬱・不安感情尺度が高まる傾向にあったが、非行直後のストレス反応でもそれが解消されず、むしろさらにストレス反応が悪化する傾向にあった。このような罪種や性別による非行のストレス反応に対する効果の違いがなぜ生じるかなどの詳細の分析については、今後に譲りたい。

6 要 約

非行少年が感じているストレス反応を明らかにするために、鑑別所中での3194名の少年を対象に、1) 鑑別所に入る前1年間の社会での生活、2) 本件非行直前の状態、3) 本件非行直後の状態のそれぞれにおけるストレス反応を測定した。ストレス反応測定に際しては、不機嫌・怒り感情尺度、身体的反応尺度、抑鬱・不安感情尺度、無力的認知・思考尺度の4尺度から構成されている中学生用ストレス反応尺度(岡安ら、1992-2)を用いた。その結果、まず、初発非行年齢や収容歴に代表されるような非行進度の進んだ者ほど、日ごろの生活において、ストレス反応を強く有していることが明らかになった。また、非行直前のストレス反応と日ごろの生活でのストレス反応の関係については、ストレス反応尺度によって異なることや、罪種によって異なることなどが明らかになった。加えて、非行直前と非行直後のストレス反応を比較してみると、変わらないとの回答が最も多かったが、概して、非行直後のストレス反応は非行直前に比べて悪化するよりは好転する傾向にあった。

注 釈

(注1) この尺度は、ストレス反応を心身両面から総合的に測定することを目的として開発されたもので、新名らによる心理的ストレス反応尺度の感情状態や志向に関する項目、及び九州大学心療内科式健康調査票 KMI の身体症状に関する項目を参考にして作成されたものである。詳しくは、岡安ら(1992-2)を参照。

(注2) 表1が示すように、本調査結果では、岡安ら(1992-2)が作成した4つのストレス反応尺度のいずれについても、最近1年の反応で.88から.91の信頼性係数、非行直前の反応では.91から.93の信頼性係数が得られた。これらの係数の値から、このストレス反応尺度は、十分な信頼性を有していると言える。なお、上記4尺度の相関は全般に高く、最近1年の反応については、最も低い相関でも、不機嫌・怒り感情尺度と抑鬱・不安感情尺度の.60であり、最も高い相関は、不機嫌・怒り感情尺度と身体的反応尺度ないし無力的認知・思考尺度の.66であった。また、非行直前の反応については、最も低い相関でも、不機嫌・怒り感情尺度と抑鬱・不安感情尺度の.58であり、最も高い相関は、身体的反応尺度と無力的認知・思考尺度の.75であった。

(注3) 実際、最近1年と非行直前の同一尺度の相関はいずれも高く、不機嫌・怒り感情尺度では.71、身体的反応尺度では.74、抑鬱・不安感情尺度では.67、無力的認知・思考尺度では.72であった。

(注4) 「ぐ犯」は非行直前と非行直後という時点の設定が難しいため、罪種要因による分析から除外した。しかし、他の要因による分析では、ケース数が多かったため、これを含めて分析した。

引用文献

- Lazarus, R.S. & Folkman S. 1984 Stress, appraisal, and coping. New York : Springer. (ラザルス・フォルクマン 本明寛・春木豊・織田正美(訳) 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—実務教育出版)
- 松本良枝 1990 ストレスと非行 犯罪心理学研究, 28(2), 76-80.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・神村栄一・山野美樹・坂野雄二 1992-1 心理的ストレスに関する調査研究の最近の動向—教育場面におけるストレスラーの

- 測定を中心として— 早稲田大学人間科学研究,
5(1), 149-158.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1992-2 中学生
用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人
間科学研究, 5(1), 23-29.
- 岡安孝弘・片柳弘司・嶋田洋徳・久保義郎・坂野雄
二 1993 心理社会的ストレス研究におけるスト
レス反応の測定 早稲田大学人間科学研究, 6(1),
125-134.
- 鈴木真悟 1988 中学生の心理的ストレスと非行と
の関連に関する研究：1. 生活事件経験および発
達の, 心理的变化に関するストレス要因としての
分析 科学警察研究所報告防犯少年編, 29(1), 27
-43.
- 鈴木真悟 1989 中学生の心理的ストレスと非行と
の関連に関する研究：2. 対処資源および心理的
ストレス反応と非行体験度との関連性 科学警察
研究所報告防犯少年編, 30(1), 13-27.